

三 倒幕と鎮西探題の滅亡

足利高氏の動きと

この知らせを受けた鎌倉では、名越高家と足利高氏に大軍をつけて上洛させた。高氏

新田義貞の挙兵

は、途中三河の矢作やはさから細川和氏・上杉重能をひそかに伯耆船上山へ向かわせ、後醍醐

醐先帝へ味方することを伝えさせた。二人は先帝の命令書を受け取って、近江鏡宿で高氏と出会い、これを伝えたという。

四月十六日、足利高氏は入京し、二十七日には伯耆へ向かって離京した。この日、名越高家は赤松勢と戦って戦死したが、足利高氏は丹波篠村よしのまで進み、二十九日、篠村八幡に願文を捧げ、先帝方として行動することを誓い、同時に、九州の大友・阿蘇・島津氏ら、諸方の武士へ味方に加わるよう呼びかける小片の密書を発した。

伯耆国より、勅令を蒙り候の間、参じ候、合力候はば本意に候、恐々謹言

(元弘三年)
四月廿九日

(足利)
高氏 (花押)

阿蘇前太宮(推時)司殿

このような文書が、少弐氏や宇都宮氏へも届けられたと考えられる。

五月七日、足利高氏は赤松入道円心・千種忠顕らと示し合わせて、六波羅攻撃を開始し、終日戦って、六波羅籠城軍を追い詰め(南方の探題北条時益戦死)、翌八日、北方の探題北条仲時が京を出て鎌倉へ向かったた

め、京都は足利高氏らによって占領された。北条仲時も追撃を受けて九日番場峠(滋賀県)で力尽き自殺し、六波羅探題は滅亡した。

六波羅が陥落して、光厳天皇、後伏見・花園兩上皇をともなつて仲時以下の敗軍が東を目指して近江路を落ちている八日、関東では、新田義貞が上野国で挙兵し、五月十五日、北条泰家軍と武蔵府中で戦つて、これを破り、鎌倉へ迫つた。五月二十一日、義貞は稲村ヶ崎から干潮を利用して鎌倉に突入し、二十二日北条高時以下数百人を自殺に至らしめた。

鎮西探題館への攻撃 六波羅探題が滅び、鎌倉も陥落した三日後、菊池武時が無念の敗死をした七十余日後の五月二十五日、少弐貞経・大友貞宗は、島津・紀井・伊東・高木・竜造寺・大村氏らに呼びかけ、

にわかに鎮西探題館を攻めて、北条英時以下三四〇人ばかりを自刃させた。松浦党・草野・山鹿・宗像などの諸氏は探題方に属して戦つたという。

翌五月二十六日には、江串三郎に擁せられて、肥前彼杵に決起して、太宰府原山に陣を進めた尊良親王が著到を受け付け、九州の統治に当たつた。

〔五〕月廿五日、武蔵〔梅理〕亮英時以下〔三〕伐の時、舍弟〔重〕貞、疵を被る間の事、見候いおわんぬ。仍つて執達〔件の上し〕

〔元弘〕三年五月廿八日

田口孫三郎殿

〔宇都宮〕高房(花押)

これは、下毛郡(三光村)の御家人田口氏が、宇都宮高房(のち冬綱、守綱と改名)



高房の花押

に、鎮西探題攻め参加の証判を得たものである。田口信連は七月八日、これを持参して、大友貞宗に証判を請い、更に七月十日、少弐貞経にも証判を請うている。不安定な世情の中で、田口氏の心中を思いやることのできる史料である。

**大和弥六左衛門
尉高房の動き**

宇都宮高房は、元徳元年（一三二九）十二月には、宇都宮頼房の跡を継いでいたらしく、当時は大和弥六左衛門尉と称し、大友貞宗とともに、弥勒寺造営料について奉行を命ぜられていた（『小山田文書』、『益永文書』）。『佐田系図』には、高房は、実は関東宇都宮貞綱の子で、『太平記』に活躍する公綱の弟であり、幼少にして城井頼房に育てられ、頼房の多数の実子をさしおいて家督の座に就いたという。次の家綱も公綱の次子と記している。まことに不思議な説である。惣領家の統制力がそんなに強かったのだろうか。

高房の実兄という公綱は、足利尊氏と同じ行動をとっているが、城井高房も、これと連絡があったのか、祖父通房以来、深い繋がりを保っていた北条氏を見限り、田口氏ら豊前の武士を率いて鎮西探題を攻撃することになったのである。